

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

バルトとスラヴの狭間にて(1): 我流バルト・スラヴ語研究顛末

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 幸和 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/518

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



バルトとスラヴの狭間にて（1）

——我流バルト・スラヴ語研究顛末¹——

井上幸和

序

一歩踏み込みさえすれば意外に根太く強靱な地下茎でもって絡みあう様が歴然と見て取れる2つの語派であるが、じつは、スラヴ語学からバルト語学へ、もしくはその逆方向にも、行き届いた初学者用の道標があるわけではない。いずれかの分野、とりあえずは、スラヴ語学に關与する者にはしるべき橋渡しを用意する責務がある。これは、明白に責務である。しかし現実とは言う、わが国ではスラヴ語学全般（それが何を意味するのは、自ずと明らかになる）に従事するというのもなく、そのうちのひとつの言語、たとえば代表格のロシア語のみを「専門」とする場合、せめてスラヴ語派の全体を見渡すスラヴ語学の地平にたとえ一歩でも踏み入れば直ちに見晴らす視界さえ持ち得ない、持とうと意気込めない者が過半である。じつに由々しい現実である。あるいはまた、ロシア語をもそのひとつとして含まれるスラヴ諸語に関わる者の数が決して少なくない中で、ロシア語学、あるいはス

1 本来であれば十分な助走から始めてしっかりとした展望をもってすすめるべきなのが正当な研究であるが、泥縄と行き当たりばったりで取り組んできたために、30余年の紆余曲折は筆者自身にさえ俄かには把握できない。互いに脈絡のないかに見える（じっさい、脈絡がないのかも知れない）綴れ衣をなんとか継ぎ接ぎしてみたいというのが、小論の本音である。

小稿は本論叢（外大論叢）におよそ相応しくない筆致と体裁であるが、本論叢は筆者にとって最も主要な研究発表の場であったことも事実であるので、本論叢のあちこちに散乱する拙論を拾い上げて前後を繋ぐ役割をすることになる小稿の掲載先もまた、本論叢がもっとも相応しいであろう。前後の真正面からの研究論文の間に異質の文章が挟まることを、どうか諒とされたい。それとともに、ロシア語（をはじめとするスラヴ語）の学習・研究が躊躇なくバルト語の学習・研究に直結することを願って止まないことを、小稿の数少ない読者に、真つ先に訴えておきたい。

ラヴ語学の専門家を標榜しながらも、印欧語族の語派としてとらえればスラヴ語派と根幹において親密な関係にあるバルト語派もしくはその中のいずれかの言語に関心を持つことに思い至りさえもしないとなると、わが国のロシア語学、スラヴ語学が伝統的に保持してきた頑なな姿勢が、欧米の平均的なレベルにさえもあえて目をそむけてきたと言わなければならない。筆者は、自他共にロシア語、スラヴ語の大家を任じてきた先人たちを、この側面に限っては「怠慢」と断じて憚るものではない。一方、わが国のバルト語学、リトアニア語研究の草分けは、必ずしもスラヴ語畑に根ざす人たちではなかった。やがて第2世代、第3世代と呼び得る世代間のバトンタッチの中で、スラヴ語畑に根ざす者、そうでない者も含めて戦後のわが国におけるバルト語研究の伝統とも言える流れが辛うじて形成され、今に至っている。ただその流れは、つねに、重もすれば滞り消え失せて地下水脈としてさえ残らないほどの、危うい流れである。

さて、筆者の立つ位置であるが、表題に模して言えばまさに「バルト（語学）とスラヴ（語学）の狭間」に息を潜め、世代としては第2世代に当たるのであろうが、第1世代の先輩から直接の薫陶を受けたわけでもなく、また次の第3世代を育成したわけでもない。世代としても狭間であり、研究分野としてもいまだ日本では定着していないバルト・スラヴ語学を標榜しているだけで、自らを振り返ってみても際の見えない茫洋とした外海に漂う小舟の感がある。原因のひとつが、まさに「狭間」の研究、「隙間」の研究であるところにある。しかも、「隙間」に迷い込んだのも、自らの意思というより偶然の為せる業である。欧米においては伝統的にいわゆる「バルト・スラヴ語学者」がいらないわけではないが、やはり、一方では印欧語比較言語学の観点から「バルト・スラヴ語学」にアプローチするか、もしくはスラヴ語学の方を究めつつ、バルト語学にまで守備範囲を広げることによって（ある

2 草分けを第1世代、以下、わが国における戦後のバルト語研究を筆者は便宜的に3世代に区分している。Acta Baltico-Slavica 31(2007)掲載のInoue/Morita, Językoznawstwo bałtyckie w Japonii. Stan i perspektywy. を参照。

いはその逆もあるかもしれない)、結果的に「バルト・スラヴ語学」にアプローチするかのいずれかである。少なくとも言えることは、欧米においては印欧語学者の多くが、そして名だたるスラヴ語学者の大多数が、バルト・スラヴ語学の一大問題である「バルト・スラヴ言語共同体」³に言及しての発言をしている。この一点だけでも、繰り返しになるが、日本には、欧米で言うところのスラヴ語学者はいない、ましてや、バルト・スラヴ語学者はいないということになる。もちろん、筆者も含めて、である。では、筆者が迷い込んだ「バルト語学とスラヴ語学の狭間」とはどのような領域であるのか。果たして「領域」と呼び得るものであるのかどうか。思うに、よりオーソドックスに、焦点を一点に定めて20年、30年と追求して後に一定程度の堅実な成果を得ることの意義を決して否定するものではないが、焦点の見極めが必ずしも容易でないところをあえて大枠で見据えて、ある程度の目処をつけて核心にヒットするか否かを打診する、とでも言えるような無手勝流の研究方法与研究分野があってもよいのではないか。当然、首尾よく終わる保証はどこにもない。ただ30年を越える「狭間」研究を振り返っていささかの自己弁明の余地を探りつつ、背伸びを恐れ冒険を避けるわが国のロシア語学、スラヴ語学に対する小声の苦言をあえて呈するのが小稿の意図である。なぜロシア語を教える者が二足の草鞋でバルト語にかかっているのか、という質問があるはずもないが、万が一、そのような質問を想定しての回答のつもりでも

3 “Balto-Slavic Linguistic Unity”と簡単に呼称されるが、これをテーマにする研究書、論文は教えるだけでも100のオーダーになる。筆者は、修士論文は別にして、論文と呼べるものの最初でこのテーマを採りあげた(「バルト・スラヴ共通語時代への視点」神戸大論叢26(2), 1975.)。爾来、このテーマは常に筆者の念頭にあったといつてもよいが、再びこのテーマに取り組んだものとしては、『バルト・スラヴ語彙対応の研究』(神戸市外国語大学 研究叢書第17冊 1986)があるくらいで、思い出したかのようにあちこちで言及することはあっても、正面からこのテーマを取り上げることはついにしえなかった。その意味で、自ら「バルト・スラヴ語学」に取り組んできたとはとても言えず、せいぜい、バルト語学とスラヴ語学の「狭間」を彷徨ってきたと言うほかないのである。なお、「バルト・スラヴ言語共同体」の問題、略して「バルト・スラヴ問題」の概要については、上記著書の第1部(「バルト・スラヴ問題」概説 pp.1-51)において当時の段階で把握できる限りを文献一覧とともに取りまとめた。その後の20年余りの時間がこの問題をどれほど掘り下げてきたかは大いに興味あるところであるが、筆者にはもはやそれをまとめて形にする力も時間もない。さらに言えば、筆者がこの問題に対してどのような立場にあるかと、今、問われても、直ちに回答する準備もまた資格もない。

ある。

第1章 <起>

もともと熟慮の末の選択というわけではなかった。学部では4年間もっぱらロシア語を学んだが、大学院に進んでまでさらにロシア語でもあるまいという見限りがあった。結局は、ロシア語にさほどの愛着がなかったのかもしれない。それでもロシア語にかかわっていたお陰で、言語学の概説書か何かの1節に言及されていた「バルト・スラヴ言語共同体」がロシア語の延長線上に頭の隅を占めていたその頃、要は「ロシア語離れ」の目線で図書室（当時、文学部閲覧室、略して「文閲」と称していた）の書庫に並ぶ古びた背文字を右左に首を傾げて辿る中に、背文字も黒ずんでよく読みとれないやや厚手の1冊がふと目にとまり、とり出してページを繰ってみた。もしこの時、この1冊のある書架の列を通らず、「ロシア語離れ」の目線を持たず、背文字もはっきり見えないこの1冊を抜き出し開いていなければ、筆者のその後の研究は、ロシア語を基盤としてオーソドックスなスラヴ語学（狭い意味での）になっていたことであろう。少なくとも現在に至る無手勝流にはなってはいなかったであろう。今にして思えば、何かに誘導されて、ふとこの一冊に手が伸びたような気もしないわけではないが、おそらく筆者の思い過ごしであろう。ともかくも、背文字では判読できないその一冊のタイトルは中表紙に、

Reinhold Trautmann, Die altpreußischen Sprachdenkmäler⁴

とあった。Sprachdenkmal, -mäler は<言語遺産>などと訳され、ロシア語やリトアニア語でも памятники языка, kalbos paminklai など同様に表現されるが、当時は、それまでの知識を超えた概念であった。ただ、altpreußische (Sprache) が古プロシア語を指す言語名であることには直ちにそれと思いが当たった。古プロシア語についての予備知識は、バルト語派に

4 1910年 (Göttingen) の刊行である。

所属する一言語ですでに「死語」であること、バルト語派には他に現在も行われている言語としてリトアニア語とラトヴィア語があること、したがって、バルト語派はこれら3言語からなる印欧語族の1語派であること、といった程度であった。じつはその当時、まずはリトアニア語を勉強することからバルト語学に入り、そこから「バルト・スラヴ語学」に広げようかと漠然と考えていた。上に、「ロシア語離れ」の目線と書いたのはその意味であり、まさにその目線に合わせるかのように飛び込んできたのが Trautmann のこの一冊（以下、『遺産』と呼ぶ）であったのである。再び「もしも」で言えば、この一冊が古プロシア語関係のものではなく、リトアニア語関係の「適切な」一冊であったら、バルト・スラヴ語学に正面から取り組むことになっていたかもしれない。どうやら2つの偶然で後に「隙間」研究を自称することになったということは、ある意味では「必然」であったのかも知れない。

ところでこの『遺産』、目次に沿ってあちこちを見ていくにつれて、どうやら古プロシア語に関するかなり基本的かつ重要な著作であることが、徐々に分かってきた。現時点からすれば百年近く前の古書の部類であるが、その後の古プロシア語研究の展開を考慮してもいまだに基本的な著作であることに変わりはない。さてその『遺産』の内容であるが、目次に沿って、この著作が取り扱う古プロシア語自体が持つ特徴との関連で紹介してみよう。

比較的長い序文（26ページ分、これについてはあとで触れる）に続く本論の部分は大きく分けると、Texte, Grammatik, Wörterbuch の3部構成である。ひとつの言語のテキストと文法と辞書（語彙集）を一冊にまとめたもの、と捉えれば何の変哲もない当該言語の包括的な概説書のようなものであるが、さらにつづきに見ていくうちに次のようなことが次第に明らかになってくる。まずテキストの部分は96ページ分、続く文法（音声論と形態論に分かれる）が198ページ分、そして辞典（実際には語形変化をも列挙した語彙索引）が172ページ分といったページ配分になっている。実は、このページ配分はかなり必然的な数字なのである。何よりも最初のテキストのページ数が活字印

刷のこの著書のフォーマットとして妥当な数字であることが重要である。すなわち、ここに古プロシア語の残存する言語資料のすべてが含まれているのである。その意味での Sprachdenkmäler である。なお、古プロシア語の言語資料⁵はすべて、ドイツ語からの翻訳テキストか、ドイツ語との対訳語彙集であり、96ページ分のテキストの部分には対応するドイツ語原文も併載されているので、実際古プロシア語言語資料としてはさらにその2分の1ということになる。つまり、ややギッシリつめた現代の活字印刷にしてしまうと50ページ程度の分量のテキストが古プロシア語の残存するすべての言語資料ということになる。次に「文法」は、100ページ足らずとも実質50ページ程度とも言えるテキストに基づいて（当時主流の比較文法的観点から）再構築された古プロシア語文法である。また、「辞典（語彙索引）」は上に目次のページ数で示した全テキストに現れるすべての単語とその語形式（変化形）を辞典形式で掲載したものである。すべての単語と語形式が形態上の表示および出現箇所とともに示されている。特に翻訳テキストにおける単語や語形式の所在位置についてはこの印刷版本における印刷ページと行数がその後長年に

5 古プロシア語の言語資料については、折に触れて個別に紹介してきた（外大論叢31：3，46：3など）。ここでは資料的制約の観点から今一度、具体化しておこう。テキストの方は、3種が区別されるが、いずれもドイツ語原文からの翻訳である。量的に最大のものは、エンキリディオ（Enchiridion、『手引書』と訳される）とも呼ばれる第3カテキズム（Katekismus）である。第3というからは、第1，第2と呼ばれる別種のカテキズムがあるように受け取られるが、実態は、第1カテキズムと第2カテキズムはほぼ同一内容で、いずれも1545年に出版された初版と第2版（改訂版）の関係にある。さらに言えば、ほぼ同一内容の第1，第2カテキズムはそのまま、第3カテキズムの中に同一内容が含まれている。第3カテキズムはルターの小カテキズム（『教理問答書』）の翻訳であるといえ、もっとも的確な内容の紹介であろう。ということは、第1，第2カテキズムと呼ばれるものは、第3カテキズムの「簡略版」（きわめて簡略化されている）あるいは「問答」形式による解説部分を省略した「教理」のみのテキストである。活字印刷にすれば2ページ分にも満たない。これに対して、1561年に出版された第3カテキズムは翻訳部分の活字印刷で60ページ弱ある。見方によれば、古プロシア語テキストはこの第3カテキズムのみと言っても良いのであるが、上のような条件つきで、伝統的に「3種」ということになっている。

これに対して2種の語彙集であるが、語彙数とともに2種を名称で紹介しておくとして、エルビング語彙集（Elbinger Deutsch-Preußische Vokabular, 約800語）とシモン・グルナウの語彙集（Preußische Vokabular des Simon Grunau, 約100語）である。2種の語彙集に共通の単語もあり、また上記テキスト中の単語とも共通するものがあるが、語彙の多様性から言えば、この2種の語彙集がなければ、古プロシア語の残存語彙はきわめて貧弱で偏ったものになっていたであろう。その意味で、たとえ表記に乱れがあり、そのまま信用できないにしても、残存テキストに劣らず、重要な言語資料であると言わねばならない。

わたくしは所在位置の表示として慣習的に用いられてきたほどである。いかにこの出版物が長年にわたって定本であり続けてきたかが推し量れよう。「文法」は記述の仕方によってさらにコンパクトにまとめることもできようが、ずっと後に出版された文法書にはさらにヴォリュームの大きいものもあり、⁶『遺産』の「文法」の部分がとりわけ詳細に過ぎるわけではなく、妥当なヴォリュームと言えよう。残存する言語資料に基づき、実証あるいは推測される範囲内での「文法」記述ということになるので、いずれにしても、記述の粗密にさほどの大きい幅が生じようもない。そして「辞典」部分に至っては全語彙、全語形式を掲載するという意図の下ではほとんど必然的なヴォリュームである。

さて、このように見てきた Trautmann の『遺産』⁷は、当時は類書の存在も知らなかったが、偶々手にした古プロシア語に関する一冊が20世紀の古プロシア語研究の基本文献中の基本文献であり、古プロシア語研究に取り組む上で最良の材料と手引きとなったことは、筆者にとって幸いであったといえる。ただ、バルト語研究の端緒が古プロシア語の言語研究になったことは、今から思えば「無手勝流」の最たるものであった。後悔しているわけではないが、只々呆れるばかりである。ともかくも、ほかに手がかりもなく、最初に出会ったのも何かの因縁かと納得して、Trautmannの『遺産』一書に取り掛かることと平行して古プロシア語の先行研究を探索し始めた。修士論文

6 あとで紹介するが、たとえば、W.R. Schmalstieg の古プロシア語文法は、タイプ印刷であるが、総ページ数が358である。

7 長い年月を経過して、さすがに現在に至って主要な文献の大半が手元に揃い、古プロシア語のテキスト、文法の出版については、その全容をほぼ迎えることができるようになったが、当時は、Trautmannの『遺産』が古プロシア語のテキスト付の文法書の唯一のものかと想像していた。確かに、20世紀の古プロシア語研究の出発点における嚆矢と言ってよいであろうが、それに先だつ19世紀においても先行する文法書が存在していた。まず以ってTrautmannの『遺産』に直結する類書として Erich Berneker, Die preussische Sprache. Texte, Grammatik, Etymologisches Wörterbuch (Strassburg, 1896) を挙げておかねばならない。これら両書の関係についてはいつか具に比較検討しなければと気がかかっていたが、未だ実現していない。M. Schultze, Grammatik der altpreußischen Sprache. Leipzig, 1897も Berneker とほぼ同時代であるが、文法のみをコンパクトにまとめたものである。なお、G.H.F. Nesselmann, Die Sprache der alten Preußen. Berlin, 1845, あるいは J.S. Vaters, Die Sprache der alten Preußen. Halle, 1821 まで遡ると、さすがに博物館行きということになるであろう。

のテーマは迷うことなく古プロシア語研究に決めた。随分と短絡的な決め方であるが、一人の人間が自ら進む道を選択するとき、必ずしも大局的な判断に基づいて冷静沈着に決定するばかりでもないという1例であろう。

古プロシア語に関する基本的な知識は概説書や百科事典からのものだけでははなはだ覚束ないものであったが、『遺産』の「序文」が大いにそれを補ってくれた。とは言っても短時間で通読できるようなものでもなくその語学力もなかったで、翻訳してみることにした。⁸30年以上前の拙い翻訳のノートは今も残っている（はずである）。そしてそこから得られた新規の知識をベースにして、実際にいくつかの角度から古プロシア語に関する小さい論文も生まれたが、いまは筆者の修士論文と直結するその後しばらくの古プロシア語研究に欠くことのできない基本文献、重要文献との出会いを辿ることで、徐々に形成される筆者流の「隙間」研究を振り返ることにする。

ところで少し脇道にそれるが、この機会にぜひとも指摘しておきたいことがある。一般に、概説書や入門書のあちこちでしばしば目にする定型句的な指摘は、同一の典拠の二番煎じ、三番煎じであることが少なくない。単なる焼き直しならまだ罪は少ないが、あたかも新事実の指摘を装うかのような二番煎じは、この上なく悪質である。というのも、古プロシア語の言語資料に言及して「その内容には、かなりの誤りがある」「資料としての価値が低く」「訳は、いわゆる逐語的直訳で、あまり正しい資料とはいえない」といったコメントが、比較的権威のある（とされる）本邦の言語学大辞典の関連項目の中できわめて断定的に堂々と述べられている。もちろん、欧米のバルト語学あるいは古プロシア語研究の専門家の中にも、同様のニュアンスの表現が見られることは事実である。しかし、決定的な違いは、後者は専門家

8 外国語による学術文献の場合、特に重要で後々読み返すべきと判断したものは、極力、翻訳しておくことを今でも学生には薦めている。我々は所詮、日本語に基づいて理解し、考察している。したがって、外国語を日本語に翻訳する作業は、とりまなおさず自身の理解のための作業である。他人に示すための翻訳は、自身の理解の結果を、よく言えば分け与える、言い様によっては、自身の理解を押し付けることに過ぎない。

であり多少とも古プロシア語のテキストを直接に扱った者の意見であるということである。(しかも、必ずしも専門家全員の意見でもない。) それに対して、前者は専門家ではない(日本国内では、スラヴ語学の「権威」ということになっていた)。したがって、「古プロシア語の言語資料は欠陥が多いと言われている」とか「表記法に乱れが多く、一貫性を欠くらしい」というのがせいぜい言えるところであろうが、それでは項目執筆者としての資質が疑われる。そこで、どこかで仕入れた専門家の評言(あるいはその二番煎じ、こちらの可能性のほうが高い)をあたかも自身の研究と判断に基づく評価のように書いているのである。出版社側もそこまではチェックできなかったであろうが、この一項目の致命的「欠陥」はせっかくの権威ある大辞典の大きい汚点となっているといえれば言い過ぎであろうか。このような言い方で相手に通じない苦言を呈した本意は、まさに「欠陥品」の烙印を押されている古プロシア語テキストの書記法の研究が、筆者の修士論文のテーマであるからである。そして、もちろん、「欠陥」を指摘することが目的ではなく、表面的には不統一が目立つ書記法にシステムとして音韻組織との連関があるのではないか、という前提の下で、単語あるいは語形式の書記法を書記素論として分析したものである。修士論文では、短母音組織に限定したが、のちにモノグラフとして書記素体系、書記音素体系をまとめた。そして独断による研究ではなく、直接の先行研究があったことも付け加えておく。

古プロシア語研究の最初の手懸りとなった Trautmann の『遺産』に関しては、なにぶんにも1910年の出版であるから入手不可能を承知の上で注文したところ、幸いに1970年に第2版が出たばかりで、書庫のくすんだ初版と違って真新しい新刊書(再版)が手に入った。(40年近く時を経て、さすが

9 隔々まで点検したわけではないが、他の大多数の項目は、当然のことながら、しかるべき専門家が地道な研究の成果を盛り込んで執筆している。スラヴ諸語関連、(上記の1項目を除いて)バルト諸語関連の諸項目については、筆者もしばしば補助教材として利用している。あるいは、当該の項目の執筆者が、大辞典全体の編集者の一人であったことが、すべてを物語っているであろうか。

に今では相当草臥れている。)ところで、1970年代は、筆者がバルト語研究の手始めのつもりでとりかかった古プロシア語研究(実際にはその後20年以上、これにかかりつきりであった)の最初の数年と重なるが、20世紀の古プロシア語研究にとっても重要な年代であったと思返される。後になって、60年代、50年代、さらに遡って戦前あるいは19世紀後半あたりまで、さまざまな関連文献を入手することができるようになったが、研究の初期段階で、とりわけマイナーといわれても反論できない古プロシア語研究に踏み入れた者にとっては、70年代に必要な不可欠の重要な研究書がほぼリアルタイムで入手できたことは、研究の行き詰まりを経験せずすんだことも含めて、幸運以外のなにものでもなかった。Trautmannの『遺産』は再版ではあるが、初版出版以来おそらく長年に亘って入手困難であったものがようやく再版されたのが1970年であったのであろう。そして、同じ1970年に米国で論文集『バルト言語学』Baltic Linguistics (Pennsylvania State University Press)が刊行された。この論文集の出版元であるペンシルヴァニア州立大学において1967年に開催された(おそらく米国で初の)バルト言語学会議での研究発表がベースになっている。幸いにも文閲書架に蔵されていた。そこに掲載された諸論文によって、古プロシア語を含むバルト語研究の現状によりやく直接触れることができたといえる。加えて、会議の主催者にしてこの論文集の編者の一人でもあるW.R.Schmalstieg(ペンシルヴァニア州立大学教授)とはその後、直接に交流することになるのであるが、すでにこの当時、米国におけるバルト語研究の中心的人物であったことは、やがて筆者の研究に大きい影響を与えることになる。

米国およびヨーロッパの西側、とりわけ当時の西ドイツのバルト語関連文献については容易に探索可能で、かなり古い年代の出版物さえ(新刊で)入手可能であった。しかし、バルト語研究の本家は当然、リトアニア(当時は旧ソ連邦内のリトアニア共和国)とラトヴィア(同じく、ラトヴィア共和国)であったはずで、欧米の出版物、関係論文にもリトアニア・ラトヴィア(共

和) 国内で出版された研究書が盛んに引用されていた。ところが、日本においてはそういった書籍を直接見ることも手にすることもきわめて困難で、偶然にどこかの図書館に所蔵(死蔵)されていることを期待するほかなかった。いまでも状況はほとんど変わらない。30年を超える年数を経て、現在ではようやく必要な文献は何らかの形で手元においているが、出版情報も含めて、バルト語学の領域に関しては、わが国はいまだ鎖国状態であるといっても大袈裟ではない。必要なときに即座に閲覧できないという焦燥感はこれまで何度となく経験してきたところである。

さて、再び70年代の研究書にまつわる話題に戻るが、前述の W.R. Schmalstieg の数多い著作のうち、古プロシア語を対象とする2つの著書が1974年と1976年に相次いで出版された。すなわち、『古プロシア語文法：3つのカテキズムの音韻論と形態論¹⁰』および『古プロシア語研究史¹¹』。いずれも原著者の所属するペンシルヴァニア州立大学の出版である。古プロシア語研究が筆者にとって五里霧中の段階で、この2つの研究文献はこの上もなく重要な指標となった。前者は修士論文のテーマとも直接に関係し、修論提出後ではあったが出版情報を得ると直ちに航空便で取り寄せた記憶がある。修士論文ではそれ以前に発表されていた Schmalstieg の論考に対する異論¹²の提出という形をとったが、古プロシア語に関する筆者の知識は、とくに70年代においては Schmalstieg の著作を唯一の拠り所としていた。また、後者は戦後の古プロシア語研究を網羅的に紹介したもので、基本的かつ重要な文献を遺漏なくフォローし収集するうえで、この研究文献解説から受けた便宜は計り知れない。

10 An Old Prussian Grammar: The Phonology and Morphology of the Three Catechisms, 1974

11 Studies in Old Prussian. A Critical Review of the Relevant Literature in the Field since 1945.

12 「異論の提出」はその通りなのであるが、ずっと後になって Schmalstieg 教授による counter-flow を受けることになる (Baltistica XXXIII (1), 1998)。この間の事情については続稿で触れるかどうか思案中であるが、筆者のバルト語研究のうちの古プロシア語研究の休止(断念)とも多少は関連する「出来事」であった。

古プロシア語の研究は、修士論文を膨らまして1982年と1984年に2つのモノグラフ¹³にまとめた段階で、一区切りのつもりであったが、その後もさらに10年以上も続けることになった。そのあたりの事情については小稿の続篇でふれることになるが、70年代後半から80年代にかけては、古プロシア語関連の文献を整える傍ら、いずれバルト語学全般さらにはバルト・スラヴ語学の構築に研究範囲を広げることを念頭に、文献を渉猟していた時期に当たる。悠長ではあるがつねに気にかけて、実際には偶然と想定外が重なって、30年も経れば、そこそこの収集結果になった。

先にも触れたように、バルト語学の本家であるリトアニアおよびラトヴィアの出版物は当初、ほとんど入手不可能で、徐々に手元に整い始めたのはようやく80年代も後半になってからである。ただし、つぎに紹介する古プロシア語研究に必須の Maziulis による記念碑的な編著書2冊は、それぞれ、その後の多くのバルト語関係の文献と同様、偶然と幸運の結果リトアニアの出版物が手元に届いた最初期のものである。すなわち、『プロシア語記念碑 [1]』¹⁴ および『プロシア語記念碑, 2』¹⁵ である。現在、手元にはそれぞれ2部ずつある。といっても、最初から2部ずつを入手しようと意図したのではない。ところで上記の2冊、刊行年の間隔はあいているが、[1]-2で一体を成すものである。いずれも「プロシア語記念碑」のタイトルを冠するが、1966年の[1]に相当するのは、古プロシア語残存資料のすべてを初めてファクシミリで出版したものである。校訂印刷本は、先にとりあげた Trautmann の『遺産』やその他でも早くから利用することが可能であったが、元本は一部の限られた研究者以外には容易に目にすることも触れることもできない代物であった。このファクシミリ版によってようやく校訂前の古プロシア語テキストの

13 A Graphology of Old Prussian: Enchiridion. A Graphonological and Phonological Study of Old Prussian Enchiridion with the Critical Text, Annals of Foreign Studies, Vols. 13 (1982), 15 (1984) (外国学研究 13, 15).

14 Prūsų kalbos paminklai [1], Vilnius, 1966. なお、paminklai は先の Trautmann の [Sprach-]denkmäler と同様、『(言語) 遺産』と訳してもよい。

15 Prūsų kalbos paminklai, 2, Vilnius, 1981.

生の姿を目にすることが可能になったのである。この出版が当時およびそれ以降の古プロシア語研究者にとってどれほど大きい僥倖であったかは想像を超えるところである。当初、編著者の Maziulis はこのファクシミリ版（きわめて詳細な解説が付されており、それ自体、独立した研究書であると言える）の出版だけで終わるつもりであったのか、1981年には同一タイトルに「第2部」に当たる表示があるが、1966年の方には後の「第2部」を予測させるような「1」の表示はない。いずれにしても、15年後に、Maziulis は独自の校訂テキストを詳細な注とリトアニア語訳を付け加えて出版した。この第2巻によって、それまで（今世紀の）大半の研究書、研究論文が依拠する校訂テキストであった Trautmann の『遺産』に並んで、あるいはそれに代わる新しい校訂テキストとして—今日から見ればすでに四半世紀以前の出版物であるが—当時（そして現在も）、最新かつ最高の校訂テキストの提供が実現した。¹⁷

さてその入手の経緯であるが、旧ソ連邦の時代には、この種の出版物を出版後に注文して購入するというシステムが本来無い。出版予告に基づいて予約注文するか、さもなくば、たとえほんの数年前の「新刊書」であっても、もはや古書として入手するしかない。加えて、旧ソ連邦の時代にはロシア語

¹⁶ とは言え、Maziulis の2冊本は一体どれほど本国の外に行き渡っているであろうか。第1部には出版部数2000とある。（第2部には出版部数の記載はない。）2千部は、この種の出版物にしては少なくはない。わが国においては、さすがに主要な大学図書館には所蔵されている。（ために検索すると9件ヒットした。）個人の所蔵も数件はあるであろう。欧米においては何倍かの数字になるであろうが、しかし、出版部数の過半はおそらく国内に所蔵（死蔵）されているものと思われる。出版元品切れ、さらには絶版といった情報が無いので、出版予告時に注文しない限り、確実な入手が望めない。筆者自身の入手経路も決して異例のことではなく、上記の図書館及び個人による入手も、それぞれに通常の出版物入手経路以外のルートによるものが少なくないであろう。あえて、筆者自身の入手経路を詳述するのも、筆者のみに与えられた幸運を披露するためではなく、この分野の出版物の入手経路が一般的に想像されるところからかなり懸け離れていることを伝えるためである。

¹⁷ 先にも述べたように、Trautmann『遺産』出版以来、長年にわたって、Trautmann 校訂テキストの印刷上のページ・行数の表示で、古プロシア語の単語や語形式のテキスト中での所在を示すのが慣習であった。筆者はモノグラフ《Нормализация прусского языка Энциклопедии, том 1（研究叢書第22冊、1992年）》において、Trautmann 流の表示と元本のページ・行表示（Maziulis 第2部の校訂テキストにも表示されている）を併記する表記法を試みた。私見では、将来的には Maziulis の校訂テキストの表示（すなわち、元本のページ・行数の表示）に統一する方向が望ましいと考える。

以外の（各共和国の）民族言語で書かれた書物は通常の出版予告にはめったに掲載されることはなかった。また、独立後の各共和国の出版物についても国外向けの情報発信がなく、出版後何年かしてヨーロッパあたりの古書店のリストに掲載されれば、あわてて注文して運がよければ手に入る、という偶然を待つしかない。要するに、昔も今も状況は大して変わらないのである。（もちろん現地に赴けば、出版直後であれば入手可能であろうが、そう頻繁に行けるわけでもない。）その他の入手方法も含めて筆者が30年以上にわたって隔靴搔痒の感が拭えないのは、一にも二にも文献入手の不自由さであった。ともかくも、上記の Maziulis の2冊はそれぞれに、入手の経路が通常ではなかった。「第1部」を入手したのは70年代のうちではあったであろうが、すでに出版後で注文することもできず古書リストにも見当たらず、したがって気長に機会を待つしかないと覚悟していた。実はこのファクシミリ出版自体は大学院時代に教養部のロシア語教室の蔵書の中に偶然見つけ、早速に複写をしておいた。数年経ったある時、ほぼ同時に、異なる2種の古書リストに当該の書名が挙がっていた。後の経験則から言っても、こういうときは必ず両方に注文しておくべきである。どちらか一方がヒットする可能性が高いし、ダブって両方が来たとしても、いわゆる「保険」と思えばよい。案の定、両方とも来た。以後もしばしば生じたことで、重複本はこの分野の宿命である。反対に、何度も古書リストに挙がってそのつど注文しても入手できない場合もしばしばである。つぎに、「第2部」にあたる1981年の校訂本の入手経路は「第1部」とは全く異なるが、幸運に不可思議な出来事が重なって、こちらも結果的に2冊が手元にある。80年代に入ることになると、先の Schmalstieg 教授の紹介で、各地のバルト語学者と書信の上で交流する機会ができて始めていた。1966年のファクシミリ版の編著者である Maziulis 教授とも80年前後から、手紙のやり取りが始まっていた。そして、1981年の「第2部」（校訂本）は、まず著者自身から贈られてきた。筆者の1982年のモノグラフを送ったのが先だったかどうか記憶は不確かであるが、サインとともに

に1982年6月18日の日付が入っている。それだけであれば、感謝すべき献本なのであるが、Maziulis 教授の献本の日付から数日あとの日付で、こちらは当時全く未知の人物（ヴィリニウス大学の所属であつたらしい）から Maziulis 教授の同じ本に自分のサインを入れて送ってきた。後者が送られてきた事情はいまだに判明しないままであるが、ともかくも幸いと不可思議が重なって、結果として「第2部」も2冊入手したことになる。ともあれ、Maziulis 教授からはその後も著書を贈っていただいております、また、筆者の1982年のモノグラフに対する書評を、ヴィリニウス大学のバルト語学専門誌にいち早く掲載していただいたりした。1990年に、前年からのモスクワ滞在の機会に、初めてヴィリニウスを訪れたとき、旧知の間柄のように歓迎されて、「ようやく（来たな）」と声をかけられた。当時、すでに Maziulis 教授はバルト学科の中心を占め、何人もの弟子を従えている風であつたが、遠来の客ということで自宅まで招いてもてなしてくれたことも懐かしい思い出である。このヴィリニウス訪問の詳細も続稿で述べたい。

古プロシア語以外のバルト諸語関連、バルト言語学関連の研究文献の探索・入手も、最初の10年ほどは欧米の出版物に限られていた。リトアニア、ラトヴィア本国の出版物が一向に視界に入っていないことに、多少の焦燥感があつたが、欧米、特にドイツやオランダで出版された研究書や語学書・辞典類だけでも少なくはなく、また総じて高価なものが多いので、その意味では手一杯であつたと言える。それよりか、リトアニアやラトヴィアの出版物は、基本的には、それぞれのバルト語で書かれているので、まずは語学的に両言語を身につけておかねばならなかつた。しかし、ラトヴィア語はもちろん、リトアニア語もいまだに苦なく読めるというほどのレベルには達していない。何をすることも一朝一夕には成らないものであるが、手を広げ、背伸びをする一方で足元は覚束ないのが、昔も今も変らない矛盾の同居である。せめてリトアニア語だけでももう少しまともなものにしておきたいと、今現在も自身を戒めている。

リトアニア語関係の語学書は、英、独、露あたりの言語で書かれたもので当面の役割は十分に果たすが、問題は辞典であった。対訳辞典の適切なものがなかなか手に入らなかった。リトアニア語とドイツ語の対訳辞典は大部なもの、古典的なものはあるが、英語との対訳辞典はリトアニア語にアクセントの表示と最小限の文法記載がないという、学習者にとっては致命的な欠点があった。リトアニア本国で出版された辞典が入手できるようになってこの障害はようやく解消されたが、今後も学習者にとっては手頃な辞典の入手に困難が残るであろう。なお、文法入門書は、いちいち掲げないが欧米の主要言語でよいものが出版されている。また、日本においてもようやく初級文法書が出版されたことを付け加えておこう。¹⁸ 詳細な文法参考書としては、アルフレッド・センの「リトアニア語ハンドブック」第1巻が随一であろう。この文法書は、現代リトアニア語文法に歴史文法的注釈を加えたといえるような構成で、リトアニア国外で出版された最良の文法ハンドブックである。セン Senn はフランス生まれであるが30歳のころアメリカに移住し、主にペンシルヴァニア大学でその学究生活の大半を過ごした。再三名前を引く Schmalstieg 教授もその弟子の一人であるが、アメリカにおけるバルト語研究の礎を築いた人である。件のハンドブックは第1巻が文法であるが、実は第2巻が第1巻に先駆けて1957年に出版されている。第2巻は古リトアニア語から現代リトアニア語にいたる時代別、ジャンル別のテキストのアンソロジーとグロッサリーに充てられている。第2巻が第1巻に先行して出版された事情は詳らかにしないが、第1巻の文法解説中の例にしばしば（先に刊行された）第2巻のテキストにおける該当箇所が付記されていたりする。初級文法を終えてより高度のリトアニア語原文、あるいはより古い時代のリトアニア語に読み進む準備として、第2巻の Lesebuch と Glossar を第1巻の文法を参照しながらじっくりと読みこなせば、リトアニア語に関する完璧な

¹⁸ 櫻井映子「ニュー・エクスプレス リトアニア語」（白水社）。

¹⁹ A. Senn, Handbuch der litauischen Sprache, Band 1. Heidelberg, 1966.

知識を蓄積することができよう。なお、ロシア語専攻の経験からの類推でいくと、リトアニア語についても、本国で出版されたアカデミー規範文法や大辞典が存在するであろうとは想像していたが、やはり、それらを現実に手にすることができたのははるかに後のことである。

バルト語研究は、リトアニア語、ラトヴィア語および古プロシア語の語学的、言語学的および文献学的（古文書学的）研究が対象となるが、一方でヨーロッパにおいては歴史・比較文法の観点からのバルト諸語の音韻、形態（および統語論）の比較文法が伝統的に「バルト諸語比較文法」として行われている。定評あるエンチェリンス『バルト諸語の音声と形態』²⁰と最も権威あるスタング『バルト諸語比較文法』²¹がよく知られているものである。エンチェリンスの方は、英訳²²がいち早く入手できた。訳者（W.R.Schmalstieg, B.Jēgers）の言によると、ラトヴィア語原文からのリトアニア語訳（*Baltų kalbų garsai ir formos*, Vilnius, 1957.）が（英語への）翻訳のベースになっているとのことである。言語学分野での重訳というのも珍しいかも知れない。リトアニア語訳の方の入手はずっと後になってからであるが、それより前にラトヴィア語原文を手にするすることができた。というのは、これは異例のことであるが、ロシア語書の代理店を通して、エンチェリンスの著作集（*Darbu izlase*）の第1巻（Rigā, 1971）が入ってきた。ラトヴィア出版の本を手にした最初である。全4巻の予告であったが、結局、4巻6分冊で1982年に完結した。全巻を首尾よく継続して入手できた時には心底ホッとしたことを覚えている。上記のラトヴィア語原文は第4巻（第2分冊）に収められている。後にバルト語学の泰斗であることをつくづく知らされたエンチェリンスであるが、ラトヴィア語でかかれたものは手に負えなかったものの、ドイツ語やロシア語で書かれた著作には大いにお世話になった。たとえば、

20 J. Endzelīns, *Baltu valodu skaņas un formas*, 1948.

21 Chr.S. Stang, *Vergleichende Grammatik der Baltischen Sprachen*, Oslo-Bergen, 1966.

22 Jānis Endzelīns' *Comparative Phonology and Morphology of the Baltic Languages*. Tr. By W.R. Smalstieg & B. Jēgers. The Hague, 1971.

これも著作集第4巻（第2分冊）に収められている『古プロシア語』²³、著作集第2巻（1974年刊）に収録されている『スラヴ・バルト研究』²⁴などは早い段階で利用した。また、著作集には入っていないがエンチェリンスの最大の主著ある『ラトヴィア語文法』（ドイツ語版、Riga 1922）が文閲書庫に架蔵されていたので、大部ながら複製して現在も手元にある。もっとも、おいそれと歯の立つ代物ではなかったし、いまだにそうである。おそらく猫に小判のままで終わるであろう。参考までに付記しておく、この著作はタイトルどおりのラトヴィア語文法というよりもバルト諸語の比較の中でのラトヴィア語の文法記述であり、詳細かつきわめて高度の内容であることだけは間違いない。

スタングの書は、出版後10年位たっていたが、洋書店を通して普通に注文し、普通に入手した。現在はそうでもないが、当時は、欧米の出版物は出版後20年、30年経っていても発注すれば入手できるものが多くあった。ノルウェイの出版物もその例に漏れなかったわけである。なおさらに、ロシアの出版物、さらにはバルト諸国の出版物が昔も今も入手に困難を伴うことを痛感する次第である。

エンチェリンスの『スラヴ・バルト研究』にもう少し触れておこう。筆者がお題目のように唱えている「バルト・スラヴ研究」は、もちろん絵空事ではないが、いまひとつ捉え難いところがある。ひとつの理由は、単純なことで、このテーマは一人の研究者の能力を超えるほどの研究の質量をこなし、なおかつひとつの問題に対して根拠とともに答えを提出せねばならないことからなかなか容易に近づき難いところがある。ひとつの問題とは、「バルト・スラヴ言語共同体」という、冒頭にも書いた19世紀以来の印欧諸語比較言語

²³ Senprusu valoda, 1943. 著作集第4巻(2)に所収。原文はラトヴィア語であるが、ドイツ語訳 Altpreußische Grammatik, Riga 1944 (Hildesheim 1974) が折りよくリプリント出版されていて入手できた。なお、前述の古プロシア語に対する「欠陥」発言の主な発信源はこの書におけるエンチェリンスの発言にあるようである。ただし、その発言自体はなんら否定的ニュアンスを伴うものではなく、単に実態を指摘したものである。

²⁴ Славяно-балтийские этюды (Харьков 1911)の単行本はいまだ目にしたことがない。

学の永遠のテーマである。これを根拠とともに認めるか否か、あるいはそのいずれでもないか（という答えもあり得る）は、バルト語とスラヴ語の双方に関わるものにとっては、避けて通れない設問である。エンヂェリンスの著作は20世紀の初頭に著された先駆的かつ独創的な研究である。音声、形態、統語法のすべてにわたってバルト諸語とスラヴ諸語を比較検討し、結論として、「バルト・スラヴ問題」に関しては、いわゆる「折衷論者」の立場を確立した。

たまたまバルト語の一部とスラヴ語の一部に関わっているが、「言語共同体」などという問題には関心はない、というのであれば、それはそれでよい。しかし、「言語共同体」に対する関心もなくしてバルト語とスラヴ語の両方に関わっていることは、無意味とは言わないが、単に労力と時間の無駄である。少なくとも筆者はこの関心を第1にして、スラヴ語（ロシア語）からバルト語（古プロシア語、そしてリトアニア語）に移行していった（正しくは、移行しようとしてみたが、実際には「狭間」に陥ってしまった）。また、このようにも言える。バルト語のいずれかに関わる者はしばらく措いて、スラヴ語のいずれか、たとえばロシア語に携わり、なおかつ、その言語の歴史や淵源に多少とも関心を抱く者であれば、ほとんど必然的にスラヴ語派とバルト語派との関係、延いては「バルト・スラヴ言語共同体」についての議論になんら関心を寄せないというようなことは、筆者としては想像を超えるものがある。

さほどエネルギーでないとしても、言語の研究には、どこか、一点に集中して猪突猛進的な傾向があり、時間の経過を忘れがちなのである。その予定ではなかったが、結果的にはバルト語研究の第1段階は、20年を要するものとなってしまった。その前半をここまで迎えてきたわけであるが、後半は、古プロシア語に拘りつつ、一方で、古プロシア語の束縛からの脱出を図る時期でもあった。詳しくは次の稿に譲る。

(2008. 9. 未了)